

## アメリカ留学時代における胡適の文学観

船 引 一 乗

このノートは、胡適が、一九一七年一月、雑誌『新青年』（一九一六年九月に『青年雑誌』から『新青年』に改題）に発表した「文学改良芻議」にどのように到達したかを考察したものである。便宜、アメリカで過ごした一九一〇年から一九一七年までの七年間における胡適の思想の展開を4つのテーマに分けて考えていきたい。

この七年間のアメリカ留学時代を窺ううえで、最も重要な文献は、『胡適留学日記』（以下『日記』と略す）である。これによると、アメリカ留学時代の胡適の文学観の成熟過程は、三期に分けることができる。

第一期は、アメリカに到着してから、一九一五年八月十八日に書いた「論文学」まで。第二期は、一九一五年八月二十六日に書いた「如何可使吾国文言易于教授」から、一九一五年九月二十一日に書いた「依韻和叔永戲贈詩」まで。第三期は、一九一六年に梅光迪（字は覲莊）が胡適に送った「梅覲莊致胡適書」から、一九一六年十月一日に発表された『新青年』通信までの間である。

第一期は、主として胡適が独自に、「韻」、「詩」、「文学」などについて考えていた時期である。

第二期は、それまで胡適が考えていたことが「如何可使吾国文言易于教授」で一度整理され、その後、友人たちとの討論を経て、新しい段階へとつながる扉をみつける時期である。この時期に初めて「活文字」「死文字」や「詩界革命」などの考え方が現れてくる。

最後の第三期は、胡適と友人の梅光迪、任鴻隽（字は叔永）との間で、「詩の文字」「文の文字」、「文学革命」などのテーマを激しく論じあった時期である。この時期の胡適の論争相手の梅光迪は、胡適がいうように、友人たちの中で最も保守的な人物であった。それ故、胡適の提唱する「文学革命」に真正面から反対し、胡適は梅光迪の保守的な意見を打ち崩そうとして、ますます過激になっていくのである。そして、これらの要因が最終的に一つに結集したものが、「文学改良芻議」であった。

以下、これらの重要なテーマのうち、《1.「死文字」と「活文字」》、《2.「詩界革命」》、《3.「文の文字」と「詩の文字」》、《4.「文学革命」》の4つのテーマにしぼり、胡適の中国文学に対する考え方の変遷と成

熟過程をみていきたいが、そのことを述べる前に、第一期における胡適の思想にすこし触れておきたい。

胡適は留学当初、もともとコーネル大学で農学を専攻していた。そのころ『日記』には、文学に関する記述はほとんど見るができない。しかし、専攻を文学にかえて以後、文学に関する記述が見られるようになる。

その記述の内容は大きく分けて3つある。1つ目は「韻」に関する記述、2つ目は「詩」に関する記述、3つ目は「文学」に関する記述である。

1つ目の「韻」に関しては、中国と西洋の韻を比べ、その共通する「韻」の踏み方を論じている。

2つ目の「詩」に関しては、「詩」を作るうえで、「真」「達意」が重要であるとしている。この「真」についてははっきりとした定義は見られないが、「達意」には「此詩全篇作極自然之語、自謂頗能達意」(自然な言葉で、意味がよく相手に伝わるもの)としている。

3つ目の「文学」に関しては、「文学」を二種類に分けて論じている。一種目は「理想の文学」、二種目は「実際の文学」である。胡適によれば「理想の文学」とは、心に思ったことを文や詩にするもので、「実際の文学」とは、何かの事実、現象に基づき、それを文や詩にするものである。そしてその「実際の文学」における詩を掘り下げ、「写生之詩」というものに着目している。この「写生之詩」の特徴として二つ挙げている。一つ目は、「一曰真率、謂不事雕琢粉飾也、不假作者心境所想像為之渲染也」(ありのままで、文章を飾りつけず、作者の想像を誇張しないこと)、二つ目は、「二曰詳盡、謂不遺細碎(details)也」(詳細を尽くし、細かなところを疎かにしないこと)である。

『日記』では「理想の文学」に触れられている部分はほとんどなく、その大部分が「実際の文学」であることは、胡適の関心が「実際の文学」に向いていることを示唆している。

以上、大まかに第一期の胡適の文学観をみてきた。この段階では胡適は独自に「韻」「詩」「文学」について模索していった。そしてこの後、様々な出来事、人物を通じて自らのテーマをより明確にし、内容を煮詰めていくことになるのである。

## 1. 「死文字」と「活文字」

a. 「如何可使吾国文言易于教授」(一九一五年八月二十七日)

これは、国語をテーマに書かれた論文である。胡適自身がいうには、「文学革命」を考えはじめた最初のものであり、その直接の動機は、「逼上梁山—文学革命的開始」(以下「逼上梁山」と略す)によれば、鍾文鰲なる奇妙な人物のピラに反発した胡適が、「私たちのような資格のある人間が、知力、才能を使って、この問題を研究しなければいけない」と決意した後に書きあげたものである。この論文で胡適は、四つの大きな項目に分けて国語を論じている。

一、(～略～)今之文言、終不可廢置、以其為僅有之各省交通之媒介物也、以其為僅有之教育授受之具也。

二、漢文問題之中心、在於「漢文究可為傳授教育之利器否」一問題。

三、漢文所以不易普及者、其故不在漢文、而在教之之術之不完。(～略～)

四、旧法之弊、蓋有四端。

1、漢文乃半死之文字、不當以教活文字之法教之。(～略～)

2、(～略～)其結果遂令吾国文字既不能傳聲、又不能達意。(～略～)

3、吾国文本有文法、而古來從未以文法教授国文。(～略～)

4、吾国向不用文字符號、至文字不易普及。(～略～) (『日記』)

一つ目に「文言は廃止すべきでなく、それを各省間の意志疎通の媒介物、教育を授受する道具とする」ということ。

二つ目に「漢文問題の中心は、漢文は教育を教え伝える武器になりうるかどうか」ということ。

三つ目に「漢文が普及しにくいのは、漢文に問題があるのではなく、教え方に問題がある」ということ。

四つ目に、古いやり方の弊害として4つある。

1. 漢文は、「半死の文字」であり、「活文字」を教える方法で教えるべきではない。〈括弧は筆者〉

2. その結果遂に吾が国の文字をして音を伝えなくし、達意をできなくしたのだ。

3. 吾が国文にはもともと文法があったのに、古より文法を以って国文を教えたことがない。

4. 吾が国では標点符合を用いなかったのもので、文字が普及しにくくなった。

この論文で、この当時の胡適の文字に対する考え方を明示している箇所がある。それは、四つ目の“1”で、「活文字」、「死文字」、「半死文字」をそれぞれ定義づけしているところである。

活文字者、日用語言之文字、如英法文是也、如吾国之白話是也。死文字者、如希臘、拉丁、非日用之語言、已陳死矣。半死文字者、以其中尚有日用之分子在也。如犬字是已死之字、狗字是活字；乘馬是死語、騎馬是活語。故曰半死文字也。（『日記』）

活文字とは、日用言語の文字であり、例えばイギリス、フランスの文がそれであり、我が国の白話がそれである。死文字とは、ギリシャ、ラテンのような非日用の言語であり、すでに死んでしまったものである。半死文字とはその中になお日用の分子があるものである。例えば犬という字は、すでに死んだ文字であり、狗という字は活きた字である。乗馬は死んだ語であり、騎馬は活きた語である。これ故に半死文字というのである。

つまり、中国文(漢文)は、「活文字」と「死文字」の2つが交じり合っている「半死文字」であると結論づけていて、さらに「遍上梁山」には、「この時、私はすでに白話が活文字であり、古文が半死の文字であることを承認していた」とある。

しかし、この「生」、「死」の区別は、日常・非日常とのちがいであるとするのみで、何をもって日常・非日常とするかは、はっきりとわからず、さらに、活文字の中国の白話とは、その当時の口語なのか、或は明清などの白話小説なのか、はたまた、その口語をそのまま文字にしたものが「活文字」になるのか、などという様々な問題は曖昧なままである。まして「遍上梁山」でいうように、「白話が活文字、古文は半死の文字である」というような明確な考えにはまだ到達しているとは考えられない。

胡適は、ここで「死文字」を廃止して、すべて「活文字」だけにするという後に見られる方向には行かずに、「死文字」を「活文字」で訳すという方向に行っている。ここでの「活文字」、「死文字」のそれぞれの意味合いは、「分かりやすい文字」、「分かりにくい文字」というほどのそれとして理解する方が、より適切であるかと思われる。それ故、後の胡適にみられるような批判的な、攻撃的な態度はみられず、古いものを現代に適應させようとする改良的な態度が色濃くみられる。

## 2. 「詩界革命」

### a. 「送梅覲莊往哈佛大学詩」(一九一五年九月十七日)

この詩は、胡適が、ハーバード大学に転校する梅光迪に送った詩で、かなり長いものである。そして、この詩のある表現をきっかけに、これから約一年あまりの議論が始まるのである。以下に胡適が「大胆な宣言」(「逼上梁山」)といっている詩の一部をあげると、

梅生梅生毋自鄙。神州文学久枯餒、百年未有健者起。新潮之来不可止、文学革命其時矣。(『日記』)

梅生、梅生、自ら鄙しむなかれ／神州文学、久しく枯餒し、百年未だ健やかなるもの起つこと有らず／新潮の来るは止むべからず／文学革命は其の時なり。

ここで、初めて「文学革命」という新しい単語がみられるが、はたして何をどうすることが「文学革命」なのかは、なおはっきりとしない。

しかし、この直後の「依韻和叔永戲贈詩」に、次のように「文学革命」と密接に関係する「詩国革命」という単語が現れてくる。

### b. 「依韻和叔永戲贈詩」(一九一五年九月二十一日)

この戲贈詩は、「送梅覲莊往哈佛大学詩」を読んだ胡適の友人・任鴻隽が、胡適に「任生用胡生送梅生往哈佛大学句送胡生往科崙比亞大学」を送り、それに対する胡適の答えがこの詩である。

胡適は、任鴻隽が「文学革命」を誤解していると考え、より具体的に「文学革命」の方法を示した。

詩国革命何自始？要須作詩如作文。

琢鏤粉飾喪元氣、貌似未必詩之純。

小人行文頗大胆、諸公一一皆人英。

願共僂力莫相笑、我輩不作腐儒生。(『日記』)

詩国革命何より始めん？／すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし／琢鏤粉飾は元気を喪わせ／貌は似るも未だ必ずしも詩の純なることあらず／小人文を行うこと頗だ大胆なるも／諸公は一一、皆人英なり／願わくは共に力を僂せ相笑うこと莫くんば／我輩は腐儒生と作らざらん。

この詩からは、それまで胡適が漠然と考えていた「詩国革命」の考えが、友人達との詩のやりとりを経て、より明確に形をなしかけている事が読みとれる。

まず最初に、「詩国革命は何から始めるのか？」とある。ここでなぜ「文学革命」が、「詩国革命」に突然おき変わったのかは、よくわからないが、恐らく梁啓超や後に胡適が文学革命の先駆けとして評価した黄遵憲の影響が考えられる(このことは、後にもう一度ふれる)。

次に「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」という主張の出所と意味は、「逼上梁山」で以下のように説明している。

宋代の大詩人の絶大な貢献は、ただ六朝以来の調子と格律の束縛を打破し、努力し、説話に近い詩体を作り出したことにある。私のこの時の主張は、宋詩を読んだ影響をもろに受けていた。だから、「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」と言ったのだ。

しかし、一九一五年九月の段階で、詩というものは話ことばに近づいた形が優れているといった様な考えが果たしてあったのか。また、あったとしても、これほど明確な形で胡適の中に存在していたのか、疑問は残る。むしろ、第一期で胡適が注目していた「写生之詩」のような、実際に則した、写実的な簡潔な表現というほどの意味合いが、色濃かったのではないだろうか。それ故、「装飾過剰の文章は、生命力を失ってしまい、詩の純粹さは失われてしまった」と続く。

この詩では、「詩国革命」のやり方が「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」と少し具体的になったが、より「詩界革命」と「文学革命」が具体的に現れてくるのが、次の「胡適到任叔永書」である。

c. 「胡適到任叔永書」(一九一六年二月二日)

これは、胡適が任鴻隽にあてた手紙であり、その内容は、「詩界革命」、「文学革命」のやり方を主張するものである。以下にその内容の一部をあげると、

詩界革命與文界革命正復相同、皆當從三事入手。第一、須言之有物。第二、須講求文法(大家之詩、無論古詩、律詩皆有文法可言)。第三、當用

“文之文字”時、不可故意避之。（『日記』）

詩界革命は文学革命とまったく同じであり、双方三つのことから始めるべきである。第一は、須らく言の物有るべし。第二は、須らく文法を講求すべし（大家の詩は古詩であれ、律詩であれ、皆文法があるということができる）。第三には、文の文字を用うるべき時は、故意に之を避くべからず。

という主張である。これは、これまでの友人達との討論や、梁啓超の「詩界革命」の問題提起を、胡適なりに咀嚼し、その方法論を導き出したものである。では、それを検討する前に、梁啓超の「詩界革命」とは、どのような内容であったのかを参考までにすこしみておきたい。

梁啓超は様々な物事について、新文学運動の先駆的存在になっているが、「詩界革命」にも言及している。例えば、梁啓超がハワイに向かう船中で書いた『夏威夷遊記』一八九九年十二月二十五日の項にこうある。

欲為詩界之哥倫布瑪賽郎、不可不備三長。第一要新意境、第二要新語句、而又須以古人之風格入之、然後成其為詩。

詩界のコロンブス、マゼランになろうと思うのなら、三つの優れたところがなければならない。第一は新意境であり、第二は新語句であり、しかもこれらに古人の風格をも取り入れ、詩を作るべきである。

ここで梁啓超は“新意境”“新語句”“古人の風格”の三点を提起している。胡適がこれらの提起を受けて思索を深めていったことは、両者の主張の近似性からみてもほぼ確実であろう。やがて胡適は独自の「詩界革命」、「文学革命」観に行き着く。それがこの「胡適到任叔永書」である。

胡適の「詩界革命」もまた、梁啓超と同様に三つの事から始めなければならないと主張している。

第一条の「須らく言の物有るべし」と、第二条の「須らく文法を講求すべし」は、後に胡適が発表する「文学改良芻議」の第一条、第三条と全く同じであり、この時すでに形づくられていたことがわかる。そして第三条の「文の文字を用うるべき時は、故意に之を避くべからず」というのは、この時期にしかあらわれない。これについて胡適は、「逼上梁山」の中で、「文学改良芻議」の第八条「俗字俗語を避けざれ」と同一の内容であるとしているが、果たしてそう断言できるのであろうか。それを明らかにする為、次に

「文の文字」とさらに「詩の文字」についてみていく。

### 3. 「文の文字」と「詩の文字」

もともとこの問題も、先にふれた「依韻和叔永戲贈詩」を発端としている。この戲贈詩をみた友人の梅光迪が、胡適の「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」という主張に反対して、以下のように主張した。

足下謂詩国革命始於「作詩如作文」、迪頗不以為然。詩文截然兩途、詩之文字(Poetic diction)與文之文字(Prose diction)自有詩文以來(無論中西)已分道而馳。

あなた〈胡適〉は、「詩国革命」は、「詩を作るには、文を作るようでないければならない」ということから始めているが、私は全くそう思わない。詩と文には、はっきりと2つの道があり、詩の文字〈Poetic diction〉の文字〈Prose diction〉は、詩と文ができて後〈洋の東西を問わず〉、道をわけて進んできたのだ。

さらに続けて、

足下為詩界革命家、改良「詩之文字」(Poetic diction)則可。若僅移「文之文字」(Prose diction)於詩、即謂之改良、謂之革命、則不可也。究竟詩不免於「琢鏤粉飾」、西人称詩為artificial、即此意也。(『胡適遺稿及秘藏書信』)

あなたが詩界の革命家になり、「詩の文字」〈Poetic diction〉を改良することはいいと思う。しかし、かりにも「文の文字」〈Prose diction〉を詩に移し、それを改良といい、革命というなら、それは許されない。結局詩は「琢鏤粉飾」を免れず、人が詩をartificialといゆのもこの意味なのだ。

つまり、梅光迪は、詩と散文はもともと違ったものである以上、その使う文字は当然違うものであるべきだという考え方で、その点で胡適のいう「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」という主張は、到底受け入れることのできるものではなかった。

そして、それを受けて再び胡適が反論したのが、先ほどふれた「胡適到任叔永書」であった。



では、この文章の第三条「文の文字を用うるべき時は、故意に之を避くべからず」とは、どういう意味なのか。それを検証するためには、胡適がどのように「詩の文字」、「文の文字」を理解していたのかをみなければならない。

胡適は「胡適到任叔永書」の中で、「詩の文字」、「文の文字」を評して次のように主張する。

即其所論「詩之文字」與「文之文字」之別(文字謂Diction)、其言亦不當。即如韓退之詩「昇堂坐階新雨足。芭蕉葉大支子肥」、白香山詩「城云臣按六典書、任土貢有不貢無。道州水土所生者、只有矮民無矮奴」(～略～)此諸例皆千古名作、試問所用「文字」是「詩之文字」乎?抑「文之文字」乎?

「詩の文字」と「文の文字」の區別を論じているその意見は「文字はDictionという」、正しいとはかぎらない。韓退之の「堂に昇り階に坐すれば、新雨足れり。芭蕉葉大にして、支子肥えたり。」、白香山の「城云く、臣六典の書を按ずるに、任土有を貢し、無を貢せず。道州の水土生ずる所の者、只矮民有りて、矮奴無しと」〈～略～〉これらのものは、みな古からの名作品である。試みに問うが、その使っている「文字」は、「詩の文字」なのか、それと「文の文字」なのか?)

可知「詩之文字」原不異「文之文字」、正如詩之文法原不異文之文法也、正如詩之取材、原不異文之取材也。(『日記』)

「詩の文字」が「文の文字」と異なることは、詩の文法がもともと文の文法と異ならず、詩の題材の選び方がもともと文の題材の選び方と異なるのと同じであることを知るべきである。

つまり、胡適は梅光迪のように文字を「詩の文字」、「文の文字」という二種類に分けることに反対し、両者は、文字、文法、題材などにおいて何ら異なるものはないと主張しているのである。

それでは、この時期に主張した「すべからく詩を作ること文を作るが如くすべし」とは、どういうことだったのか。一言でいえば、詩と文との垣根をとり除くということであろう。つまり、詩を作るのに際し、その詩で使う文字が、文言でよく使われているものでも、感情や情景がうまく伝わるのであれば、それはそれでよく、わざわざ「琢鏤粉飾」した詩に独特な文字を使用

しなくてもよい、ということであろう。

この段階で、胡適と梅光迪の立場の違いがはっきりとみてとれる。以下にわかりやすくまとめてみると、

ア. 文字について

梅光迪一文字には、「詩の文字」と「文の文字」の二種類がある。

胡適一文字は文字であり、詩、文などの区別を強調すべきではない。

イ. 「琢鏤粉飾」について

梅光迪一「琢鏤粉飾」こそ必要不可欠である。

胡適一「琢鏤粉飾」は不必要である。

つまり、梅光迪などの伝統的知識人が、詩を特別なものとして受けとめていたのに対し、胡適は、その詩をとりあえず文と同列においた。そのことによって、梁啓超などがすでに提唱していた「詩界革命」を自分なりに消化し、現状の文学改革を推し進める鍵を手中にしつつあったのである。しかし、この時の胡適は、詩を白話小説、戯曲と同列に置くところまでは進んでおらず、そこに到達するにはもうすこし時間がかかる。この時期の経緯を、胡適は「逼上梁山」で以下のように説明してる。

(一九一六年)二月から三月にかけて、私の思想において一つの根本的な新たな自覚がでてきた。私はかつて徹底的にこのように考えた。中国文学史は、ただ文字形式(工具)の新陳代謝の歴史であり、ただ「活文学」が随時「死文学」にとってかわる歴史にすぎない。文学の生命は、全くその時代の生きた工が、その時代の情感と思想を表現できるか否かにかかっている。工具が硬直してしまえば、必ず別の新しい、生きたそれに替えなければならない。これが「文学革命」であると。

この「逼上梁山」は、一九三二年十二月三日にアメリカ留学時代の思想遍歴について書かれたもので、必ずしも一九一六年当時の胡適の状態を正しく書いているとは限らない。この時期に、これほど明確に文学史を「活文学」と「死文学」の交代の歴史とまで明確に考えていたのかどうかは、疑問が残る。考えていたとしても、もうすこし漠然としたものであり、これ以後続けて起こる論争を経て、次第に明確なものになったのではないかと考える方が自然であろう。

4. 「文学革命」

これまで、「死文字」と「活文字」、「詩界革命」、「文の文字」と「詩の文字」などをめぐる若き胡適の模索の跡を調べてきたが、以下にこれらの最終的な結論「文学革命」にどのようにして到達したかをみていく。

a. 「梅觀莊致胡適書」(一九一六年三月十九日)

この手紙は、胡適の手紙に対する梅光迪の返信であるが、胡適の送った手紙の内容は、「逼上梁山」の中で「一九一六年三月に、私は梅觀莊に手紙を書き、私の新たな見解を大まかにいい、宋元の白話文学の重要な価値を提示した」とあるのみで、全文まではわからない。しかし、この時に宋元の文学に注目していたのは確実である。梅光迪は、その手紙の中で、

手紙の中で宋元の文学を論じてあり、大変目がみひらかされました。文学革命は「民間文学」(Folklore Popular Poetry, Spoken language, etc)から始めるべきであり、これはいうまでもありません。(『日記』)

と書いていたという。この「民間文学」というのは、胡適のいう「白話文学」と全く同一のものかどうかは、はっきりしないが、少なくとも梅光迪がそれまで注目していなかった文学の領域にふみこんだのは確かである。

b. 「吾国歴史上の文学革命」(一九一六年四月五日)

梅光迪の意見をうけて書いたのが、この文章である。

胡適は最初に、「文学革命」は中国では、以前に何回も行われたことがあると詩と文の二つの分野に分けて述べる。まず詩の分野では、

三百篇變而為騷、一大革命也。又變為五言、七言、古詩、二大革命也。賦之變為無韻之駢文、三大革命也。古詩之變為律詩、四大革命也。詩之變為詞、五大革命也。詞之變為曲、為劇本、六大革命也。

三百篇が変わり離騷になった。これが一回目の大革命である。さらに五言、七言、古詩に変わった。〈これが〉二回目の大革命である。賦が無韻の駢文に変わった。〈これが〉三回目の大革命である。古詩が律詩に変わった。〈これが〉四回目の革命である。詞が詩に変わった。〈これが〉五回目の革命である。詞が曲、劇本に変わった。〈これが〉六回目の革命である。

散文の分野では、

韓退之「文起八代之衰」、其功在於恢復散文、講求文法、一洗六朝人駢儷纖巧之習。此亦一革命也。（『日記』）

韓退之は「文は八代の衰を起こす」とし、その功績は、散文を回復し、文法を重んじ、六朝人の駢儷精巧の習慣をとり除いたことにある。これもまた一つの革命である。

このように胡適はそれぞれの分野で、過去に何度も「文学革命」が起っていることをあげ、自分が提唱している「文学革命」もまた疑う余地がないことを宣言している。

そして、自分が提唱している「文学革命」を以下のように説明する。

總之、文学革命、至元代而登峯造極。其時、詞也、曲也、劇本也、小説也、皆第一流之文学、而皆以俚語為之。其時吾国真可謂有一種「活文学」出世。儼此革命潮流(革命潮流即天演進化之迹。自其異者言之、謂之「革命」。自其循序漸進之迹言之、即謂之「進化」可也)不遭明代八股之劫、不受明初七子諸文人復古之劫、則吾国之文学必已為俚語的文学、而吾国之語言早成為言文一致之語言、可無疑也。（『日記』）

結局、文学革命は元代に至って頂点に達した。その時の詞、曲、劇本、小説はすべて、第一流の文学であり、すべて俚語で書かれてあった。その時、我が国に本当に「活文学」が世に出たということができる。もしこの革命の潮く革命の潮流とは、天演進化の軌跡のことである。異なるものからこれを言え「革命」と言う。循序漸進の軌跡からこれを言えば、「進化」と言ってもよいが、明代の八股の災難、明初の子七子などの文人の復古の災難にあわなければ、我が国の文学は、きっとすでに俚語の文学になっていただろうし、我が国の言語はとっくに文言一致の言語になっていたのは、疑いのないことである。

ここで胡適は、進化の過程での最高の「文学革命」は、元代であるとし、その理由は、詞、戯曲などの文学が、一流のものであるからであり、さらに、その一流の文学はすべて「俚語」で書かれてあり、それらこそが「活文学」であるとした。そして最後に、

惜乎五百餘年来、半死之古文、半死之詩詞、復奪此「活文学」之席、而「半死文学」遂苟延殘喘、以至於今日。（『日記』）

残念なことは、五百年來、半死の古文、半死の詩詞が、この「活文学」の席を奪い、「半死文学」が遂に余命を保ち、今日に至ったことである。

と胡適は現状に対する不満を語っている。

それでは、ここであげている「活文学」、「半死文学」とは、いったいどのような意味で胡適がいつているのかを考えてみる。

「俚語」で書かれてある文学作品を「活文学」といい、それ故に『水滸伝』、『西遊記』などが、一流の文学作品であるとする。そして、「半死文学」というのは、本来「文学革命」で淘汰されるべきであった「死文学」が、明代の八股文、前七子の復古運動の為に、余命をながらえたものを「半死文学」とした。

つまり胡適は、「文学革命」を段階的にとらえ、「文学革命」の最も新しい段階である「俚語」で書かれた文学作品を着想したのであろう。しかし、言文一致の音の部分、どの地方の音にするなどの意見は提出しておらず、その問題は結局、アメリカ留学時代では解決されずにいた。

### c. 「白話文言之優劣比較」（一九一六年七月六日）

この文章は、この年の六月、クレブランドで開かれた第二回国際関係討論会の為に、イサカに立ち寄り、その間の友人達との討論した結果をまとめたもので、「白話」のすぐれた点を九つの項目に分けて述べている。

- 一、今日之文言乃是一種半死的文字、因不能使人聽得懂之故。
- 二、今日之白話是一種活的語言。
- 三、白話並不鄙俗、俗儒乃謂之俗耳。
- 四、白話不但不鄙俗、而且甚優美適用。凡言語要以達意為主、其不能達意者、則為不美（～略～）
- 五、凡文言之所長、白話皆有之。而白話之所長、則文言未必能及之。
- 六、白話並非文言之退化、乃是文言之進化。（～略～）
- 七、白話可產第一流文学。（～略～）
- 八、白話的文学為中国千年来僅有之文学（小説、戯曲、尤足比世界第一流文学）。其非白話的文学、如古文、如八股、如箭記小説、皆不足與於第一流文学之列。

九、文言の文字可讀而聽不懂；白話の文字既可讀、又聽得懂。(～略～)不如此者、非活の言語也、決不能成為吾国之國語也、決不能產生第一流の文學也。(『日記』)

一、今日の文言は半死の文字である。なぜなら、人に聞いて理解させることができないからである。二、今日の白話は活きた言語である。三、白話は卑俗ではない。凡庸な学者がそれを卑俗といっているにすぎない。四、白話は卑俗でないだけでなく、たいへん優美で用いるのに適している。およそ言語は、達意を主とし、達意できないものは美しくないのである。五、およそ文言のすぐれている所は、白話にはすべてあり、白話のすぐれている所は、文言は必ずしもこれに及ばない。六、白話は文言の退化ではなく、文言の進化したものである。七、白話は、第一流の文學を生み出すことができる。八、白話の文學は、中国千年來わづかに存在する文學である〈小説、戯曲はもっとも世界の一流文學に比べるに足る〉。その白話でない文學、例えば、古文、八股、筆記小説はすべて第一流の文學の列に入れるに足りない。九、文言の文字は読むことはできるが、聞いてもわからない。白話の文字は読むこともできるし、聞いてもわかる。このようでないものは、活きた言語ではなく、決して我が国の國語になることはできず、第一流の文學を生み出すこともできない。

これら九つの項目は、内容的に大きく分けると四つになる。

一つ目は、第一、二、九項で、文言は聞きとれないが、白話は聞きとることができ、それ故、文言は「半死の文字」である。

二つ目は、第三、四項で、白話は達意でかつ優美である。

三つ目は、第五、六項で、白話は文形の進化した形であり、それ故、文言の長所はすべて白話にもある。

四つ目は、第七、八項で、白話には一流の文学作品があるが、文言にはそれらが無い、ということである。

つまり胡適は、「白話」とは、読んでわかり、聞いてわかり、達意かつ優美で、第一流の文学作品を生み出す文言の進化したもので、文言は、読んでわかる以外は、白話の長所と正反対をなすものとした。

この段階で胡適は、「白話」、「文言」に独自の定義を与え、「白話」の方に軍配をあげた。その最大の理由を「聞いてわかる」点においたが、この視点は、その後も「文學改良芻議」に至るまで変わっていない。

ところで、この段階における「聞いてわかる」とは、これ以前から胡適が

高く評価している元代の戯曲や明清の白話小説などの「聞いてわかる」文章、単語を、現代に復活させようというほどのこととして言われている。この問題は、一九二〇、三〇年代に新たに共通語、大衆語を作るという、より大きな問題に発展することになるが、それは後の課題である。この時点で胡適のいう「白話」が、その当時の中国人の話す言葉という認識にまで到達せず、元明清代で現代に適應する「白話」というあたりにとどまっていたのは、歴史の限界というべきであろう。それ故、むろんまだ「白話」の発音や、語法をどの地方のものを採用するのかなどの問題も、むろんまだ提示されていない。

4つのテーマに絞り、アメリカ留学時代における胡適の文学革命をめぐる思想の変遷をみてきた。ここでの思索、友人達との討論を煮詰めた結果として「文学改良芻議」が出来上がった。いわばこの「文学改良芻議」は無名の中国人留学生達の“共同作品”でもあった。ただ決定打を撃ったのは胡適であった。

以上、「文学改良芻議」に到達するまでの胡適の思索の軌跡を整理してみたが、じつはもう一つ調べるべき課題として、胡適の思索の栄養素となったヨーロッパ近代国民国家形成とそれに伴う言語革命に関する彼の考察がある。それこそが、如上の思索に不断に胡適を駆り立てたはずであるが、より大きなその問題は、このノートではとても扱いきれないので、他日を期すこととする。

#### 主な参考文献

- ・『胡適留学日記』一～四。中華民国三十四年十一月出版。胡適著。商務印書館。
- ・『胡適文存』第一集。中華民国四十二年十月出版。胡適著。遠東圖書公司。
- ・『胡適書信集』上。一九九六年九月。耿云志、欧阳哲生編。北京大学出版社。
- ・『中国新文学大系』第一集、建設理論集。「逼上梁山」。香港文学研究社。